

旅  
と  
せ  
と  
ら

—歌川広重から東山魁夷まで—



THE ART OF TRAVEL



旅  
に  
ま  
つ  
わ  
る

鑑賞ガイドブック

# I 旅と絵のであい

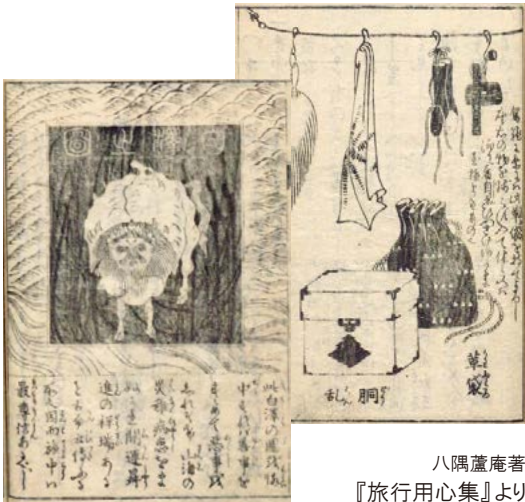


初代歌川広重  
東海道五拾三次之内 庄野 白雨  
1830年代  
郵政博物館

全55図のうち、47番目「庄野宿」を主題とした作。激しい夕立の中、旅人が蓑笠をかぶって坂道を駆け出す姿が印象的。1833～34年頃に刊行された保永堂版「東海道五拾三次」シリーズ中でも屈指の傑作とされている。

## 江戸時代に人気を博した旅のハウツー本

旅の携帯品や、宿や温泉でのふるまい方といった実用的な注意点がまとめられている。たとえば「宿についたら、非常時のために表と裏の出入口を確認すること」などは現代にも通じる。持ち運びに便利なハンディサイズ。



八隅蘆庵著  
『旅行用心集』より  
1810年  
旅の図書館



五代歌川国政  
新規定掛永代橋往来  
繁華佃海沖遠望之図  
1875年  
東京都江戸東京博物館



歌川芳春  
東京名所遊覧双六  
明治前期  
東京都江戸東京博物館

名所双六は、江戸中期以降、庶民の間で人気を博した遊び。ここでは、浅草寺のような定番の名所のほか、1873年に完成した萬世橋や、1875年に守田座から新富座に改称した芝居小屋などの新名所が経由地に選ばれている。

旅のお供は、  
旅の用心集！

## 交通インフラの発達と旅

右は隅田川に架かる橋の一つである永代橋を描いたもの。江戸の中心と深川を結ぶ重要な交通路で、崩落等によって、架け替えが度々なされた。赤穂浪士が討ち入りの帰りに渡った橋としても有名。

下は、川崎の六郷川(多摩川)の明治初頭の姿を描いている。1688年の大水で橋が流失して以後、渡し船が使われ難所とされた場所であったが、1872年の新橋～横浜間の鉄道開通に伴い、川崎と蒲田を結ぶ木造の鉄道橋が建設された。鉄道の開通によって、庶民の間で旅がより身近なものとなった。



東海道の難所を  
蒸気機関車で  
一気に通過！

三代歌川広重  
東海名所  
改正道中記  
六郷川鉄道 川崎  
神奈川迄二り半  
1875年  
郵政博物館

## 江戸幕府の街道整備と旅ブーム

江戸時代後期、庶民の間で旅ブームが起ったのを知っていますか？大きな要因として、幕府が江戸を中心とした全国統治のために街道を整備し、誰もが比較的安全に長距離を移動できるようになったことが挙げられます。また、泰平の世が続く、農民や町人に経済的余裕ができたことも、旅ブームの引き金となりました。

当時はもっぱら徒歩の旅で、宿場町に泊まりながら、何日もかけて目的地を目指しました。そうした旅の道中を面白おかしく記したのが、十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』です。弥次さん喜多さんが江戸から伊勢そして京都へと至る物語は、1802年に刊行された後、シリーズ化して21年もの間、続編を出し続ける大ヒットとなります。

また、初代歌川広重による傑作「東海道五拾三次」シリーズもこの時期に登場します。江戸・日本橋から京都・三条大橋までの東海道の53ある宿場を中心に全55図に描いたもので、広重は、各地の風光明媚な風景はもちろん、道中の人々の多彩な姿をそえて、当時の旅の様子や庶民の生活を豊かに表現しました。手軽に買うことのできた、こうした紙の媒体は、ガイドブックの役割も果たし、旅ブームをけん引しました。

とはいえ、実際に旅をするには、けものいる山中を歩く必要があったり、川を渡るのに渡し舟に乗りなければならなかったりと、様々な危険や苦勞が伴いました。そのため旅先での心得を61ヶ条にまとめた八隅蘆庵の『旅行用心集』がハウツー本として広く読まれました。

## 旅ブームを後押しした視覚メディア

明治維新後、日本は近代化を進め、1872年には、新橋～横浜間に初の鉄道が開通。あわせて、橋などの交通インフラの整備が進み、庶民の旅のあり方がより効率的で多様なものへと変化しました。また、中央集権化や都市化も進み、観光や帰省といった新たな旅の需要が生まれ、全国的に旅ブームが再燃します。

そうした社会の動向を背景に、鉄道の開通や橋などの建造物を描いた錦絵が数多く制作され、旅情をかき立てました。また、江戸時代から親しまれていた絵双六も、明治期には新しい名所をテーマにしたものが登場し、家庭で楽しみながら地理を学べる娯楽としてさらに人気を集めます。江戸時代から明治期にかけて、旅がいつそう身近になる中、こうした視覚メディアは、いずれも旅への憧れや興味を深める役割を果たし、旅ブームを後押ししました。

インド



ヒンドウ教徒による灯籠流しがテーマ。人物を大きくとらえた大胆な構図、柔らかで明るい色彩、衣装や装飾品の繊細な表現が評判となった。

横山大観  
流燈  
1909年  
茨城県近代美術館

横山大観は岡倉天心の勧めで1903年、渡印。「東洋美術の源流を探究すること」が念願で、喜んで決行したと述懐している。しかし、当時の大観は、前衛的な表現を追究し、絵が売れず困窮していた時代で、友人の菱田春草とともに絵の頒布(はんぷ)会を開きなんとか費用を工面して渡航に至った。本作は、現地のガンジス川で目にした光景からインスピレーションを受け、帰国後しばらくしてから描いたもの。第3回文部省美術展覧会に出品され文部省の買い上げとなるなど、大観が世に認められ、画業の転機となった作品。

イタリア



藤島武二  
ポンペイの廃墟  
1908年頃  
茨城県近代美術館

古典古代への憧れ

のロングステイ

岡鹿之助は1924年、文部省在外研究員として3年の予定で渡仏するが、現地の制作環境や西洋美術に惹かれ、滞在は15年にわたった。本作は、フランスの片田舎に実在した天文観測所を題材にしたもの。岡はこのモチーフを好み何度か描いている。



岡鹿之助  
観測所(信号台)  
1926年  
茨城県近代美術館

フランス

3年のはずが15年

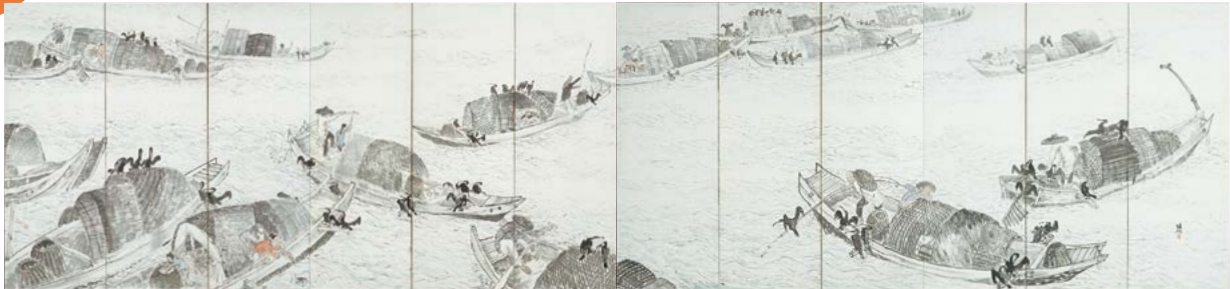
「日本画」という概念の誕生と画家たちの旅  
ここでは、明治以降、海外へ渡った画家たちに焦点をあてます。その前段として、「日本画」という言葉が1882年に初めて登場したことをご存知でしょうか。当時は、文明開化により西洋化が進む一方で、伝統的な日本絵画は軽視される傾向にありました。そうしたなか、日本独自の絵画を守ろうという意識が高まり、「日本画」という言葉、ひいては概念が生まれます。

その後、日本画の概念が浸透していくことで誕生した「日本画家」たちが、次々と国外に旅立つようになります。価値観が変化し、自国の美術の理論、技術・技法、そしてアイデンティティを見つめ直すうちに、彼らの海外への関心や憧れが高まり、渡航へとつながったのだといえるでしょう。  
日本画家たちは、特に仏教の源流とされるインドや中国に強く惹かれました。この流れを先導したのが思想家の岡倉天心です。天心は、1903年刊行の『東洋の理想』で「アジアは一つ」と述べ、同年、横山大観をインドに導くなど、日本画家によるアジアとの文化的交流の端緒を開きます。

II 海外への 憧憬

アジア？ ヨーロッパ？行先はどちらへ？

中国



富田溪仙  
長江鷁船  
1919年頃  
茨城県近代美術館

中国の伝統的画題の土地を巡る

富田溪仙は、1909年に台湾・中国へ渡航。西湖など中国で長く描き継がれた土地を巡り、墨画研究を深めた。滞在中の記録によれば、7月に福州を出航し、上海まで800kmほど移動した後、2日間にわたり長江に停泊している。本作はその際の印象を描いたものだろう。この旅で溪仙は、ハードな移動に加え、終盤で伝染病にかかり入院治療するなどの経験をしているが、帰国後、「困難労苦」したことの方が、面白く感じられ、人生における「旅の価値」があると述べている。

ヨーロッパへ渡った洋画家たち

一方で「洋画」という概念もほぼ同時期に誕生しました。明治初頭、イタリアから招いたお雇い外国人のアントニオ・フォンタネージの指導により、国による本格的な西洋画教育が始まります。その後、フランスで美術を学んだ黒田清輝が帰国。1896年、東京美術学校(現東京藝術大学)に開講した西洋画科で後進の指導にあたった黒田は、日本の洋画界に絶大な影響を与え、後に「日本近代洋画の父」と称されるようになりました。

洋画家たちは国内で学んだ後、本場での研鑽のため、ヨーロッパ、特に「芸術の都」とうたわれていたパリへと渡ります。その背景として、フランスを中心に美術教育が発展していた点と、サロンと呼ばれる政府主催の美術展に代表されるような発表の場が充実していた点が挙げられます。たとえ異邦人だとしても、美術を通じて受け入れられる土壌が育まれていたのです。そうした状況もあり、洋画家たちは、日本画家たちに比べ、現地に長くどどまるケースが多くみられます。長期滞在した画家たちは、更にヨーロッパをはじめとする国々へ旅をし、見聞を広げました。

受け継がれた名所を描く文化

江戸時代、一世を風靡した広重の「東海道五拾三次」に代表されるように、浮世絵版画による「名所絵」が流行しましたが、明治以降は印刷技術の発達とともに次第に忘れられていきました。しかし、富士山をはじめとする風光明媚な「名所」を描くという文化は、日本画・洋画を問わず、さまざまなジャンルにおいて連綿と受け継がれていきます。

ちなみに「名所」という語は、現在では絶景や旧跡などで名高い場所を指しますが、古くは「なごころ」と呼ばれ、和歌に詠まれる歌枕の土地を意味していました。歌枕の名所は、心象風景を投影したり理想の姿を重ねたりする場でもあり、時には現実を誇張した表現で語られることもあったため、実在しない理想郷のような場所さえ含まれていました。

新しい名所の登場

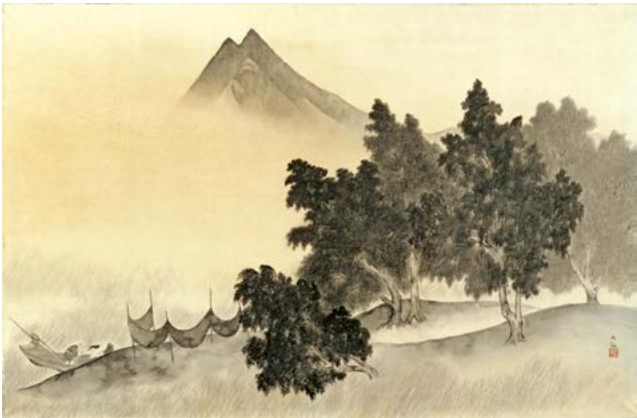
一方、江戸時代の旅ブーム以降、実際に訪れることのできる名所が数多く生まれました。加えて、中国・宋代の湖南地方における名所「瀟湘八景」を源流とする「〇〇八景」や「〇〇十景」といった名所選定が日本各地で流行し、これらは定番の景勝地として根付いていきます。

以降、こうした名所を題材とする絵画が盛んに描かれるようになりますが、しばしばそれらは現実の風景よりも理想化された姿で表現されました。たとえば、富士山や筑波山が荘厳な姿で描かれるのは、これらの山が美しさと霊性をあわせ持つ特別な場所として捉えられていたことのあらわれといえるでしょう。描かれた風景の美しさの奥には、当時の人々が抱いた憧れや願いが重ねられていたのかもしれない。



五姓田義松  
朝陽の富士  
1903-05年頃  
茨城県近代美術館

日本の象徴をリアルに

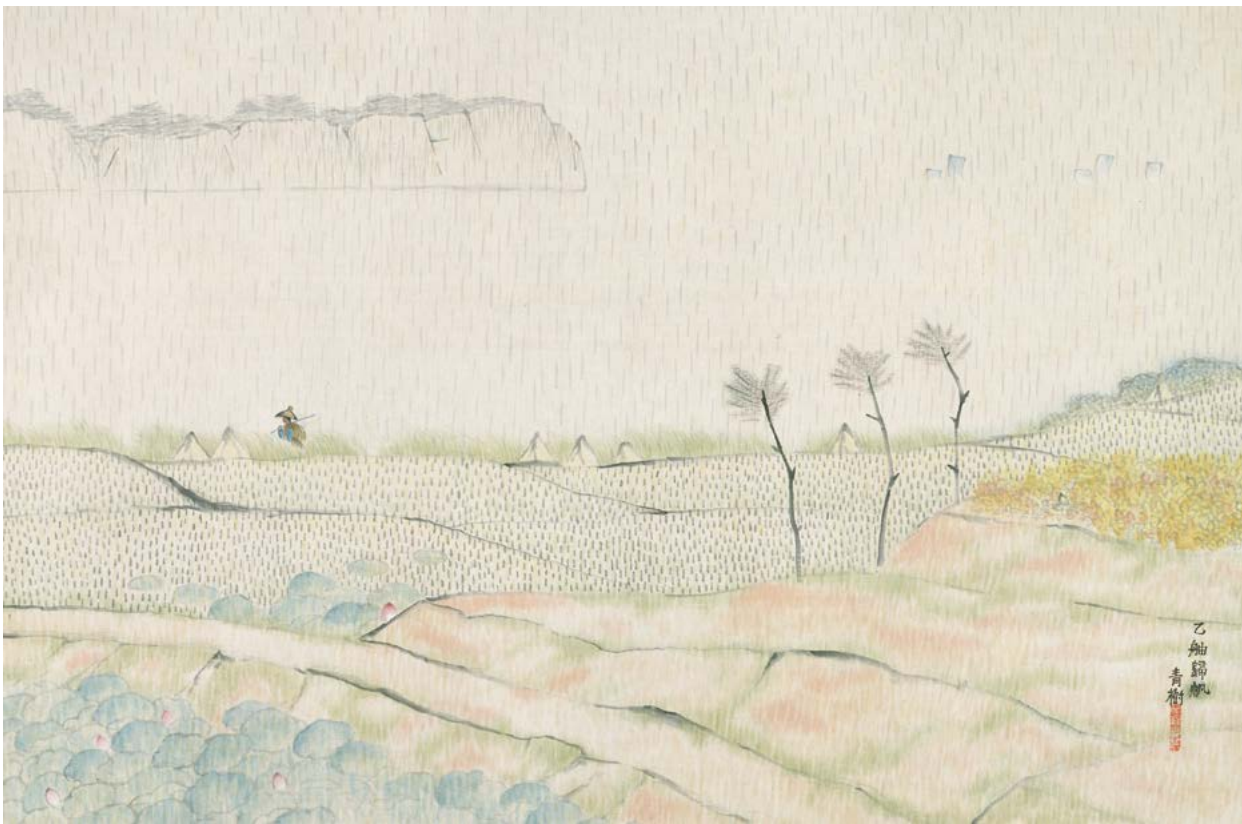


横山大観  
紫山返照  
1935年  
茨城県近代美術館

神々しき筑波山

幕末から明治期にかけて活躍した五姓田義松は、いち早く西洋絵画の技法を学んだ洋画家のひとり。特に写真のような写実的描写を得意とし、富士山を繰り返し描いた。

筑波山は、山肌が夕日に照らされると紫色に見えるため、「紫峰」と呼ばれる。大観は、山裾の霞の部分に金泥をふんだんに用い、神々しさを表した。



小茂田青樹  
乙鱸帰帆  
1915年  
茨城県近代美術館

金沢八景のひとつ

中国の「瀟湘八景」をルーツとして選定された金沢八景のひとつ。題名にある「帰帆」とは、夕暮れ時に船が港に戻ってくることを指す。本作では、画面右上方に帆船を描いてこれを表す。小茂田青樹は、抑制された色彩と構図によって画面に詩情を漂わせている。

中国・宋代に湖南省の瀟水と湘江流域（現在の洞庭湖周辺）において選ばれた8つの景勝地のことを指す。それぞれの風景は、天候・時間・季節などと結びつけて詩情豊かに名づけられており、南宋の文人や画家に好まれた。

- 平沙落雁（へいさらくがん） / 遠浦帰帆（えんぼきはん） / 山市晴嵐（さんしせいらん） / 江天暮雪（こうてんぼせつ）
- 洞庭秋月（どうていしゅうげつ） / 瀟湘夜雨（しょうしょうやう） / 漁村夕照（ぎょそんせきしょう） / 煙寺晚鐘（えんじばんしょう）

17世紀、水戸の徳川光圀の招聘で来日した明の心越禅師が詠んだ漢詩にもとづく8つの景。現在の横浜市にある能見堂からの眺望を中国の瀟湘八景になぞらえている。以後、画題として広く普及した。

- 平潟落雁（ひらかたのらくがん） / 乙鱸帰帆（おつとものきはん） / 洲崎晴嵐（すさきのせいらん） / 内川暮雪（うちかわのぼせつ）
- 瀬戸秋月（せとのしゅうげつ） / 小泉夜雨（こずみのやう） / 野島夕照（のじまのせきしょう） / 称名晚鐘（しょうみょうのばんしょう）

金沢八景とは？

III-1 名所を描く

名所に重ねた理想のイメージ？

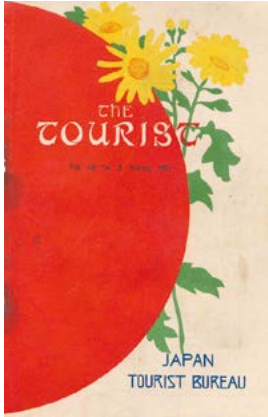
# 旅のエトセトラ

旅の「エトセトラ」として、画家たちが装丁や挿絵を手掛けた旅行案内や旅行雑誌といった印刷出版物をご紹介します。明治から昭和にかけての社会状況の変化とともに、どのような旅の出版物が刊行されてきたのでしょうか。

## 外国人ツーリストの誘致と出版物

明治以降、日本の国内旅行は次第に外国人にも開かれていきました。1893年には渋沢米一ら実業家の主導で非営利団体「喜賓会」が設立され、外国人向けの宿泊手配や通訳紹介、案内書の刊行を行いました。しかし日露戦争後の不況により活動は縮小し、1912年にはその事業を引き継ぐ形で「ジャパン・ツーリスト・ビューロー」(現日本交通公社、以下ビューロー)が誕生します。ビューローは、鉄道院(のちの鉄道省)や日本郵船などの協力を受けた半官半民組織として、外国人旅行者の誘致を本格化しました。翌1913年には英文の日本旅行案内『JAPAN』を刊行し、海外での配布を通じて観光情報を発信します。

表表紙と裏表紙が  
左右対称の絵柄



1924年(第12年 第2号)



1931年(第19年 第2号)

後年は表表紙と裏表紙がつながる  
パノラマ式の絵柄に



朱色を基調とした夕景のような背景に、五重塔のシルエットが浮かび上がる。日本古来のもみじと桜の模様が添えられ、四季を感じさせる。当時すでに外国人による本格的な日本のガイドブックが発行されていたが、本書は携帯に便利な小冊子として情報をコンパクトにまとめており、実用性を重視した作りとなっている。

装丁：杉浦非水  
発行：ジャパン・ツーリスト・ビューロー  
『JAPAN』  
1913年  
(公財)日本交通公社 旅の図書館

## グラフィックデザイナー 杉浦非水の起用

旅行案内『JAPAN』の装丁を手がけたのは、日本初のグラフィックデザイナー・杉浦非水でした。彼の起用は、ビューロー出版事業を統括していた生野團六によるものです。生野は当初、日本画家や洋画家に装丁を依頼しましたが満足するものができず、洋画家・黒田清輝に相談したところ、その門下であった非水を紹介されたといえます。当時の非水は三越図案部に在籍し、商業美術の先駆者として注目を集めていました。その後、ビューローの主要出版物を多く手掛けることとなります。『JAPAN』は初版1万部に続き、翌年に2万部を増刷、さらに改訂版として4万部が発行され、当時としては画期的な規模の外国人旅行者誘致の出版物となりました。

## 『ツーリスト』と杉浦非水

ビューローは『JAPAN』刊行と同じ1913年に、旅行雑誌『ツーリスト』を創刊します。当初は、日本語のみの雑誌でしたが、第3号以降は、英文ページを加え、外国人旅行者も読者として想定されました。同誌は、国内外の旅行案内に加え、観光に関する統計データや政策の提言などを掲載し、「時事的な情報誌」としての性格を持っていました。

また同誌は、1936年6月までの23年間で全189号を刊行。そのうち創刊から20年間の装丁を手掛けたのが、ビューローにゆかりの深い杉浦非水です。非水は、アール・ヌーヴオーをはじめ西洋の装飾美を取り入れ、植物などの写生を重視したデザイナーでした。同誌では、外国人の読者を意識してか、日の丸、奈良の鹿、富士山など、日本ならではのモチーフを積極的に用い、表紙デザインに独自の美意識と洗練をもたらしています。



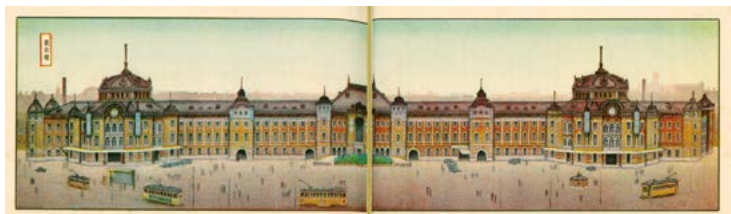
装丁：杉浦非水  
発行：ジャパン・ツーリスト・ビューロー  
『ツーリスト』  
(公財)日本交通公社 旅の図書館



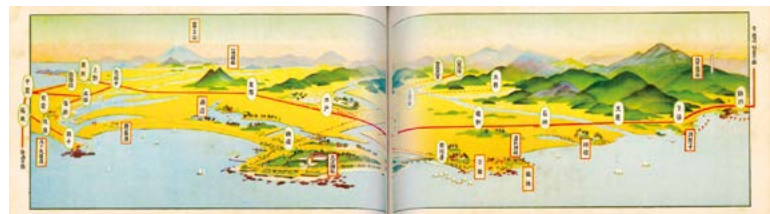
1931年(第19年 第5号)



川中島、戸隠山、善光寺、姨捨山(長野県)



東京駅



筑波山、大洗磯前神社など(茨城県)

装丁・挿絵：吉田初三郎  
発行：鉄道省  
『鉄道旅行案内』  
1924年

『鉄道旅行案内』と  
吉田初三郎の挿絵  
よしだはつさぶろう  
吉田初三郎

1872年に日本初の鉄道が開通して以降、主要都市と郊外を結ぶ鉄道路線が次々に整備されました。鉄道院は利用拡大を目指し、1910年代から『鉄道旅行案内』を精力的に刊行します。1921年の開通50年記念版では吉田初三郎を装丁と挿絵に起用し、初三郎ならではの鳥瞰図の絵柄を生かすため、判型を縦型から横型に大幅に変更。彩り豊かな路線図に、名所や名物の挿絵を加えた本案内書は大好評を博し、1年で40以上の版を重ねるヒットとなりました。3年後の改訂版ではその名が巻頭に明記され、初三郎は一躍知られる存在となります。



横山大観「華嚴の瀧」



山元春挙「上高地」



挿絵：横山大観ほか 発行：鉄道省  
編集：大阪毎日新聞社、東京日日新聞社  
『日本八景』  
1928年

9300万通が集まりました。その後、審査を経て選ばれたのは、雲仙岳、華厳滝、十和田湖、室戸岬、上高地、木曾川、狩勝峠、別府温泉の8か所でした。新聞社や鉄道省は連載や写真展示、周遊券販売などを通じて、観光需要を盛り上げました。翌年に刊行された記念書籍『日本八景』では、審査員でもあった日本画家の横山大観や山元春挙らが挿絵を、小説家の幸田露伴や俳人の高浜虚子らが紀行文を担当。1930年には、雑誌『主婦之友』に付録として収録された吉田初三郎による鳥瞰図が空前の人気を博すなど、日本新八景に対する人々の熱狂はしばらく続きました。

昭和初期の1927年、大阪毎日新聞と東京日日新聞は、新時代の名所を選ぶ「日本新八景」の企画を実施しました。山岳や湖沼など8部門で候補地を募り、はがきによる人気投票を実施。地元の名所を当選させようとする運動も加熱し、41日の応募期間で当時の日本の総人口の1.5倍にあたる約

## 日本新八景の選定と熱狂



華厳滝

装丁・挿絵：吉田初三郎 発行：主婦の友社  
『日本八景名所図絵』  
1930年

## 日中戦争以降の国内のツーリズム

1937年勃発した日中戦争以降、戦時体制の強化により国内観光誘致は次第に下火となりました。しかし、旅をする文化が完全に消えることはなく、ビューロー(1941年に東亜旅行社と改称)は、前掲の『ツーリスト』のほかに旅行雑誌を発行し続けます。

その一例が国内向けの『ツーリスト案内叢書』で、1935年から1943年にかけて全28集が刊行され、「京都地方」や「東北地方」など日本各地が紹介されました。また、皇紀2600年の1940年には、伊勢神宮などへの聖地巡拝が旅行目的として推奨され、多くの案内書や絵葉書が発行されます。当時の記事や広告からは、健康維持や日本軍の武運祈願のための旅も推奨されていたことが見て取れます。



発行：日本旅行協会  
(ジャパン・ツーリスト・ビューロー)  
『ツーリスト案内叢書  
第十五輯 伊勢参宮』  
1941年8月



伊勢神宮

絵：吉田初三郎  
発行：京都祇園観光社  
『紀元二千六百年  
三聖地記念絵はがき』  
1940年



発行：国際観光局、鉄道省  
『TRAVEL IN JAPAN』  
右：1940年 Vol. VI No.1(装丁：川端龍子)  
左：1941年 Vol. VII No.1(装丁：横山大観)  
(公財)日本交通公社 旅の図書館

## 戦中の外国人旅行者誘致

『TRAVEL IN JAPAN』は、鉄道省の外局として設置された国際観光局の開局5周年を記念し、1935年に創刊された英文季刊誌で、1944年まで刊行されました。各号約2万部が発行され、主にアメリカの図書館などに配布されます。誌面では日本の自然や芸術、伝統芸能に加え、当時の産業や子どもの遊びといった日常生活にも焦点を当てました。本誌は、戦中において対戦国に日本文化の多様な側面を紹介した稀有な旅行雑誌であったといえるでしょう。同局課長・井上万寿蔵は、いかなる時局でも「婉曲な観光宣伝だけは大手を振って外国にはいつていける」として、観光事業の弾力性と強みを語っています。装丁には、主に日本画家たちが起用され、日本の美しさを象徴する富士山や桜といった絵柄を描きました。

## 文人墨客を魅了した「水郷」

水郷の美しい風景は、松尾芭蕉をはじめ、古くから多くの文人墨客に親しまれ、彼らの創作の源泉となってきました。こうした文化的関心の背景には、利根川下流域に位置する現在の茨城県潮来市・鹿嶋市、千葉県香取市佐原に広がる利根川水運の存在があります。もとは度重なる洪水に悩まされた地域でしたが、江戸時代のはじめ、徳川家康の命によって大規模な治水事業「利根川東遷」が行われ、以後、物流の要所として経済的にも文化的にも活気ある地域となり、行楽地としても栄えました。

また、水郷地帯には、古代より信仰されてきた鹿島神宮・香取神宮・息栖神社の「東国三社」があります。旅ブームとともに、庶民の巡礼が盛んとなった江戸時代以降、「東国三社まいり」は、伊勢詣でと並ぶ霊場巡りとして人気を集めます。こうした交通と信仰の交差点であったことによって、多くの文人墨客がこの地に引き寄せられたのでしょう。

## 画趣に満ちた風景を求めて

明治以降、鉄道網が全国に敷かれると、陸上交通が主流となり、大正後期にかけて舟運の役割は急速に縮小しました。水郷地帯は交通の要衝としての地位を失い、経済の中心から徐々に外れていきます。

一方で、大正以降もなお、多くの文学や絵画に水郷の風景は描き継がれました。例えば、日本画家の竹内栖鳳は幾度となく潮来を訪れ、同地は一見平凡で退屈に見えるものの、画家としては「至るところ画趣に富んで飽きること知らない」と愛着の念を語っています。しかし、素朴で情緒ある水郷の風景は、高度経済成長期以降、開発や公害により次第に失われました。今では一部に面影を残すものの、かつての姿は、写真などの記録や作品の中でしか見られなくなっています。

遠景に見える  
とがった山が  
檜ヶ岳

## 毎年夏は山籠もり

吉田博は「日本アルプスは全部登った」と豪語するほど、山に深い愛着を抱いた画家であった。毎年夏になると1ヶ月から3ヶ月にわたって山に籠もり、自身が理想とする景觀と天候に巡り会うために、膨大な時間と労力を費やしたという。本作では、飛騨山脈の野口五郎岳から望む北アルプスの名峰・檜ヶ岳が、実景のままの精緻な描写で表されている。さらに、吉田ならではの鋭い観察眼によって、刻々と移ろう山岳の一瞬の光景が鮮やかに描き出されている。

# Ⅲ-2 名所を描く

## 水の風景、山の風景の魅力とは？

## 水郷の風景に魅せられて

竹内栖鳳は伝統的な日本画の技法に西洋絵画の写実性を取り入れ、新たな表現を追究した。なかでも「水郷」は、代表的な題材の一つ。本作は、墨一色で水辺の草木や温潤な空気感を表し、静けさと郷愁が漂う風景となっている。



竹内栖鳳  
水郷  
1941年  
茨城県近代美術館

## 聖なるものがおわす場所

遠方にそびえるのは筑波山。男体山と女体山の二峰をもち、それぞれいざなぎの神、いざなみの神が祀られている。画面左下に記された「葉山茂山」は、和歌で筑波山を詠む際に、併せてよく用いられる表現。小川芋銭は、画中に葉の生い茂る道を行く数人の人物をさりげなく描いている。

小川芋銭  
二神乃御山詣  
制作年不詳  
茨城県近代美術館



遠くに  
そびえる筑波山

## 巡礼からスポーツ、レクリエーションへ 山への新たなまなざし

日本における登山は、古代から中世にかけての宗教的巡礼に始まります。熊野三山や富士山といった霊山は神仏の宿る聖地とされ、人々は信仰のために山に登りました。そして明治以降は、西洋から伝わった登山技術や精神（アルピニズム）の影響により、山へのアプローチが広がり、それまでの修験道や信仰巡礼の登山に加え、スポーツやレクリエーションとしての登山が一般に普及します。

こうした変化のなか、絵画の世界でも、自ら登頂し、その体験に基づき山をとらえる画家たちがあらわれます。なかでも吉田博は、豊富な登山経験と写実表現を融合させた、山岳風景画の第一人者です。吉田の作品は、単なる風景の再現にとどまらず、近代の日本人が山に抱いた「登る」「見る」「懂れる」といった新たな意識を芸術として表現したものといえるでしょう。

## 漱石が賛辞を贈った作



本作について、夏目漱石は、「画家の感情がこもって」いて、「（小杉未醒が）自己に最も適切な方法で、自己を最も切実に且つ有意義に表現した結果」だとして、賛辞を贈っている。

潮来に取材した作で、漁師が船の上で網を整える姿がリアルにとらえられている。第5回文部省美術展覧会で最高賞に輝き、小杉未醒の出世作となった。未醒は、潮来を「佳き風景」と気に入り、何度も訪れている。

小杉未醒  
水郷  
1911年  
東京国立近代美術館

## IV 旅する画家

近代以降、交通網の発達や情報伝達手段の進歩により、旅は一層身近で手軽なものへと変化します。そして、見知らぬ土地であう風景や人々に心を惹かれ、国内外を問わず、旅する画家が数多く登場しました。ここでは、画家たちが様々な形で残した旅の記録のエピソードとともに、旅によって生まれた名作を紹介します。

### もりたこうへい 森田曠平と八丈島

森田曠平は、最も好きな浜木綿の花とともに女性を配した作品をかねてから構想しており、その実現のため1958年11月、42歳の時に八丈島にわたります。スケッチブックに残された記録を辿ると、6日間の滞在で、海岸沿いに島をほぼ一周しながら、浜木綿の群落が広がる岩場や植物園などで次々に写生。また、島の住人たちとも積極的に交流し、めならべ（若い娘のこと）の髪型や風俗、伝統的な絹織物の黄八丈<sup>きやうはちぢょう</sup>について学びました。森田は、そうするうちに「夢想的な女人像が重なるこの作品の構図が決つてきた」と述べています。こうして、旅先での風土とのあいや人々との交流が重なり合い、《八丈のめならべ達》が生み出されました。

### 島の女性たちの生命力

中央に座る女性は、現地でのスケッチと比べると、衣装の柄や着こなし、体格に違いが見られる。特にスケッチでは華奢で姿勢もやや不安定だったのに対し、本作では、三角形を思わせる安定したシルエットが強調されている。森田は、島の女性たちが内に秘めるたくましさや生命力の強さのようなものを表そうとしたのかもしれない。

森田曠平  
八丈のめならべ達  
1959年  
茨城県近代美術館



現地で出会った老婆に取材して描いためならべの髪型の一つ。



黄八丈の古布のスケッチ。森田の各地への写生旅行の案内役を担った金川道之助氏の自宅で取材した。



黄八丈の着物を着了モデルのスケッチ。記録によれば右は11月8日に現地で描かれている。左は1959年5月30日の日付があり、作品構想の際の下絵と思われる。



### 国民的風景画家・東山魁夷と旅

国民的な風景画家として知られる東山魁夷は、各地へ足を運び、スケッチを重ねることを制作の礎としました。一年の半分以上を旅に費やすほど、旅とともに生きた画家であり、その根底には、写実を重んじた師・結城素明<sup>ゆうきそのい</sup>の教えがありました。しかし東山は、「素明に」写実と云われたのは、けつして、自然の表面を写すことではなかった」と語り、現地での写生を単なる再現にとどめず、心象風景へと昇華させています。

### 憧れの北欧へ

東山は、1962年4月から7月にかけて、かねてより憧れていた北欧4ヶ国（デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド）でのスケッチ旅行を敢行しました。若き日にドイツ留学をした東山は、事前にドイツからドイツ語・デンマーク語辞書と、デンマークの地図やガイドブック等を取り寄せ、綿密な旅程を組んで各地を廻っています。また、画文集をはじめ多くの著作を手がけた東山は、この北欧旅行でも紀行文を執筆し、撮影した風景写真とともに複数の美術雑誌等で発表するなど、旅の記録を多角的に残しました。

フィンランドのクオピオを描いた《白夜光》は、北欧シリーズの終盤に位置する作品で、東山は「本当の旅の終わりの記念にしかかった」と記しています。北欧の夏の風物詩である白夜に心を打たれて生まれたという本作は、旅の終着点を象徴するとともに、画家のまなざしと記憶を静かに凝縮した一枚となっています。

### 旅の締めくくりに訪れた森と湖の国

東山は、北欧の旅の締めくくりとして、「森と湖の国」と称されるフィンランドで湖を船で巡ることを計画した。寒さの厳しいこの国では、湖水巡りが可能なのは6月から8月に限られており、とりわけ白夜となる夏こそが、その風景を味わうのに最もふさわしい時期であると考えたという。

また「生の喜びをよく知っているのは、むしろ太陽に恵まれない北欧の人々ではないだろうか」と語る。本作では、短い夏の間、静かな白夜の光に照らされて生命を謳歌する自然の姿を表現している。

東山魁夷  
白夜光  
1965年  
東京国立近代美術館

### 東山が繰り返し描いた 鏡写しの風景



東山魁夷  
映象  
1962年  
東京国立近代美術館

スウェーデンのノルディングローであった風景をもとに描かれた。

表紙掲載作品

中上／東山魁夷《白夜光》1965年 東京国立近代美術館  
中下左／初代歌川広重《東海道五拾三次之内 庄野 白雨》1830年代 郵政博物館  
中下右／吉田博《槍ヶ岳》1921-26年 茨城県近代美術館  
左上／初代歌川広重《東海道五拾三次之内 御油 旅人留女》部分 1830年代 郵政博物館  
右下／三代歌川広重《東海名所改正道中記 旅人留女 亀山 関迄ちり半》部分 1875年 郵政博物館

旅にまつわる絵とせとら  
—歌川広重から東山魁夷まで—  
鑑賞ガイドブック

会 期：2025年7月16日(水)～8月31日(日)  
主催・会場：茨城県近代美術館  
編集・発行：茨城県近代美術館 ©2025  
執筆・構成：茨城県近代美術館 主任学芸員 高田紫帆  
制 作：光和印刷